

# キャリアデザインカリキュラムの開発Ⅱ

## ～グランドスキルを身に付けるという視点から～

藤 上 真 弓

Developing a Curriculum for Career Design II  
From the viewpoint of training “Grand Skill”

FUJIKAMI Mayumi

(Received September 29, 2017)

### はじめに

次期小学校学習指導要領の解説において、子どもたちが成人する頃の社会の状況について、「厳しい挑戦の時代」「予測が困難な時代」「急激な少子高齢化」「成熟社会」等（文部科学省、p.1、2017）と表現されているが、現在、社会の要請から、キャリア教育においても、「基礎的・汎用的能力」を身に付ける重要性について叫ばれている。キャリア教育において育成すべき「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」（文部科学省、p.15、2011 a）だと示されているが、具体的にはどのような能力なのだろうか。また、それらを発揮したり身に付けたりするためには、どのような土台が必要なのだろうか。そして、今求められているこれらの能力を、子どもたちに身に付けさせるために学校教育が果たすべき役割とはどのようなものなのだろうか。

中央教育審議会答申において、「これからの教育課程には、社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく『社会に開かれた教育課程』としての役割が期待されている」（中央教育審議会、p.19、2016）と述べられている。また、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標をもち、教育課程を通してその目標を社会と共有していく」（中央教育審議会、p.19-20、2016）ことの重要性についても述べられている。これまで以上に、学校で学ぶことと社会のつながりを意識したカリキュラム・マネジメントが求められているのである。

そして、「これからの教育課程や学習指導要領等は、学校の創意工夫の下、子供たちの多様で質の高い学びを引き出すため、学校教育を通じて子供たちが身に付

けるべき資質・能力や学ぶべき内容などの全体像を分かりやすく見渡せる『学びの地図』として、教科等や学校段階を越えて教育関係者が共有したり、子供自身が学びの意義を自覚する手掛かりを見いだしたり、家庭や地域、社会の関係者が幅広く活用したりできるものとなることが求められている。教育課程が、学校と社会や世界との接点となり、さらには、子供たちの成長を通じて現在と未来をつなぐ役割を果たしていくことが期待されているのである。」（中央教育審議会、p.20、2016）とも説明されている。キャリア教育におけるカリキュラムも、「学びの地図」となることや、子どもたちが自分や社会の未来を切り拓く能力を身に付けていくことに貢献することが求められているのである。

### 1. 研究の目的・方法

まず、「基礎的・汎用的能力」の土台にあたる原動力ともなる資質・能力を明らかにする。

次に、「社会に開かれたカリキュラム」となるように、目指す子ども像や育む資質・能力、教師の手立て例等も見える化された義務教育期間の「基礎的・汎用的能力」の土台となる能力を育成するカリキュラムを作成する。

### 2. 研究の実際

#### 2-1 「基礎的・汎用的能力」の土台について考える

##### ① 現代社会における課題をもとに、

##### 「基礎的・汎用的能力」の土台について考える

本田は、「現代はすでに『近代社会』とは異なる諸特性をもつ『ポスト近代社会』に相当足を踏み入れた状態であるとみなすことができる」（本田、p.7、2005）と述べている。「近代社会」は、「『業績主義』を人々の社会的位置づけに関する支配的なルールとする社会」であり、「『メリトクラシー』」（本田、p.11、2005）

と呼ばれるのに対し、本田は、「ポスト近代社会」を、「メリトクラシーの亜種ないし発展形態」の「『ハイパー・メリトクラシー』」（本田、p.21、2005）と呼んでいる。

稲垣は、「メリトクラシー（業績原理）の前提において、業績として想定されているのは本人がもともと持っている能力であって、努力がそれほど大きな意味をもっているわけではない。」（稲垣、p.197、2017）と説明している。しかし、稲垣は、日本においては、「努力して能力を発揮すれば、ライフチャンスが広がってきつと望ましい生活ができるようになるはずだ」という信念（メリトクラシーの神話）が学校教育を支えてきたのである。（稲垣、p.196、2017）、「生まれでも才能でもなく、努力が重視される。」（稲垣、p.198、2017）と、日本の教育の特徴について挙げている。そして、その特徴を、「日本型メリトクラシー」＝「努力型メリトクラシー」（稲垣、p.198、2017）と表現し、「プラスイメージとマイナスイメージの両方をともないながら、日本の教育を支える文化になってきたことは間違いない。」（稲垣、p.199、2017）と述べている。「能力や才能のなさを補填する態度としてマイナスに評価される場合もあるだろう」（稲垣、p.199、2017）が、目標に向かって「努力できる能力」や「努力の仕方が分かる能力」は、現代社会においても求められる「基礎的・汎用的能力」の土台となる能力の1つではないかと考える。しかし、本田は、「ハイパー・メリトクラシー」と称される現代社会のもとで要請される能力のことを「ポスト近代型能力」（本田、p.22、2005）と呼び、その能力を構成する諸要素は、努力やノウハウとはなじまない性格のものである。（本田、p.23、2005）と述べている。

稲垣は、「ポスト近代型能力」について、「文部科学省の掲げる『生きる力』に象徴されるような、個々人に応じて多様でありかつ意欲などの情動的な部分—『EQ』—を多く含む能力である。既存の枠組みに適應することよりも、新しい価値を自ら創造すること、変化に対応し変化を生み出していくことが求められる。組織的・対人的側面では、相互に異なる個人の間で柔軟にネットワークを形成し、その時々的重要性に応じてリソースとして他者を活用できるスキルをもつことが重要になる。」（本田、pp.22-23、2005）、具体的には、「多様性・新奇性」「意欲、創造性」「個別性・個性」「能動性」「ネットワーク形成力、交渉力」（本田、p.22、2005）と説明している。今後求められる能力は、知識・理解レベルだけの能力でないことは明らかである。それらの土台となる能力も同様であろう。

「キャリア発達」とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」

（中央教育審議会、p.17、2011）と定義付けられている。それと照らし合わせてみても、自分らしい生き方を実現する過程で出会う課題も置かれた状況等も人それぞれであり、ノウハウだけで乗り越えていけるはずもない。

また、現代社会は「答えなき時代」（奈須・諸富、p.11、2011）とも言われるように、現代社会における課題に対して唯一無二の正解があるわけではない。これまでの価値観や手法だけで解決することが難しい課題も多く、他者と力を合わせなければ、解決の糸口を見いだすににくい。今後の社会を生き抜くためには、身に付けてきた能力をそのまま活用するだけでなく、目の前の課題や置かれた状況等に応じて、それらを加工したり、他者とも協働して新たな課題解決方法を生み出したりしながら、臨機応変に対応していくための能力が必要なのである。

しかし、それらを身に付けることは、本当に努力となじまないものなのであろうか。

稲垣は、「個性や創造性、ネットワーク形成力を『詰め込む』ということは、笑い話か笑えない悪夢でしかない。これらの柔軟で不定型な、しかも各人各様であることを期待されている能力は、どのようにすれば形成されるのかについて社会的に合意されたセオリーはいまだ確立されていない。どうすればそれを手に入れられるのか、誰にもはっきりとはわかっていない。かろうじていえるのは、（中略）、個々人の生来の資質か、あるいは成長する過程における日常的・持続的な環境要件によって決まる部分が大きいであろうということだ。その理由は、個々人の人格や感情、身体などと一体化したものであるからである。このことは、『ポスト近代型能力の形成にとっては家庭環境という要素がおそらく重要化するということの意味している。』（本田、pp.23-24、2005）と述べている。「詰め込む」という手法で、今後求められている能力の育成できないことは明らかであろう。しかし、「努力」＝「詰め込む」ではないはずである。「努力できる」ということは、自分がたどり着きたい姿の実現を目指して、壁や困難にぶち当たろうとも、前向きに前に歩み出し続けることができる能力だと考える。その能力を発揮するためには、「意志」をもったり、「前に踏み出すための術」を身に付けたりすることが重要である。また、「努力できる」「努力を惜しまない」等というように、自分を突き動かす「意志」をもてるものに出会うことは、「自分らしい生き方を実現していく過程」（中央教育審議会、p.17、2011）において重要である。「意志」をもてるからこそ、実現するための術を主体的に獲得していこうとするのである。この能力は、経済産業省が挙げている「社会人基礎力」の中の1つ「前に踏み出す力～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～」（経済産業省、2006）と同様

の能力であると考え。この能力は、土台にあたるものではないかと考える。

稲垣は、P.ブラウンが用いた「ペアレントクラシ」<sup>1)</sup>という言葉を手を挙げながら、「子どもの能力と努力によってライフチャンスが方向付けられる『メリトクラシ』よりも、親の財産や願望によって教育の成果や選抜が決定される度合いがより高い『ペアレントクラシ』の傾向が高くなっているというのである。」(稲垣、p.50、2017)と述べている。置かれた家庭環境によって、子どもたちの教育に格差が生じてしまう事実があることは否定できない。だからこそ、格差を減らし、子どもたちが前に踏み出すための能力を身に付けるためには、日本に暮らす全ての子どもに保障される義務教育が果たすべき役割は大きい。

## ② 就業に関するスキルの研究をもとに

### 「基礎的・汎用的能力」の土台について考える

表1は、川嶋が整理した「就業に関するスキル」である。

表1 「川嶋が整理した『就業に関するスキル』」

Generic Skills	あらゆる職業を越えて活用できる「移転可能Transferable」なスキル
Vocational Skills	特定の「職業」に必要な特定の「技術的」スキル (あいまい)
Employer-wide Skills	特定の「組織」に必要なスキル (日本企業が重視してきた)
Job-specific Skills	特定の「仕事」に必要なスキル (OJTが基本)

(川嶋、p.54、2011)を改変

川嶋は、「『ジェネリック・スキル』を「高校までの教育においてその土台が形作られ、学士課程教育を通じて形成されていくもの」(川嶋、p.56、2011)と、考えている。義務教育段階においては、もちろん、特定の職業や組織、仕事に限定したスキルではない。高等教育で育むことをねらう「ジェネリック・スキル」の土台となるのが、義務教育9年間で育む「基礎的・汎用的能力」であり、それらを見極める必要がある。

国立教育政策研究所は、卓越した職員とそうでない職員へのインタビューを分析したマクレーランドの「社会の中で働く大人が成功する要因は何か」を探った研究の結果を例に挙げ、資質・能力と就業能力の関係を明らかにしようとしている。優れた業績の要因は、「①異文化の人の真意を発言から聞き取る対人関係感受性、②敵対する人も含め他者の尊厳と価値を認めて前向きな期待を持ち続ける信念、コミュニティ内の権力関係など政治的なネットワークを迅速に察知する力」(国立教育政策研究

所、pp.41-42、2016)であるという。

しかし、この分析は、外交官という職業に特化した分析であるため、「極めて領域固有な能力」(国立教育政策研究所、p.46、2016)、「企業の人材管理でコンピテンシー・モデルがうまく働いているのだとすれば、それは、職務によって評価対象の状況が限定されているためかもしれません。それは、学校という場で様々なことを学ぶ児童生徒たちと、条件や目的が大きく違います。」(国立教育政策研究所、p.47、2016)という批判もある。

具体的にどの分野に関する「感受性」「信念」「察知する力」なのかということは職によって異なるにせよ、これらの力は、「基礎的・汎用的能力」であると考え。

しかし、例えば、「信念」をもっていたとしても、「信念」が揺らぐ時は長い人生の中で何度となく起こるものである。そういった「信念」が揺らぐ時を支えるものは何かを見極めていく必要がある。それこそが、「基礎的・汎用的能力」の土台に当たるものであると考える。

## ③ 離職率をもとに、

### 「基礎的・汎用的能力」の土台について考える

厚生労働省の2016年の調査によると、2013年には、大学卒新入社員のうち、3年以内の離職率は31.9%(内訳：1年以内12.8%、2年以内10.0%、3年以内9.1%)となっていたが、2016年には、3年以内の離職率は、11.3%(内訳：1年以内11.3%)と下がってはいる。2013年においては1年以内の離職率が最も高かったが、2016年の内訳は1年以内のみとなっている。他の校種を見ても、短大等卒の離職率は17.4%(内訳：1年以内17.4%)、高等学校卒の離職率は17.2%(内訳：1年以内17.2%)、中学校卒の離職率は40%(内訳：1年以内40%)となっており、どの校種卒においても、内訳は1年以内に離職する者ばかりとなっている(厚生労働省、2016)。

独立行政法人労働政策研究・研修機構によると、新卒3年以内の離職者における離職理由は、男性の場合、高校卒の1位は「人間関係」であり、「やりたいこと」よりも「賃金」を理由に離職する傾向が強い(独立行政法人労働政策研究・研修機構、p.91、2017)。2位は「労働時間・休日・休暇の条件」「賃金の条件」となっている。専修・短大・高専卒男性の場合、1位は「キャリアアップ」、2位は「労働時間・休日・休暇の条件」、3位は「自分がやりたい仕事と異なる」となっている(独立行政法人労働政策研究・研修機構、p.91、2017)。大学・大学院卒男性の場合は、1位は「労働時間・休日・休暇の条件」、2位は「自分がやりたい仕事と異なる」、3位は「肉体的・精神的健康を損ねた」となっている(独立行政法人労働政策研究・研修機構、p.92、

2017)。

女性の場合は、いずれの学歴も、「労働時間・休日・休暇の条件」「肉体的・精神的健康を損ねた」「人間関係がよくなかった」が上位4項目以内に入っている(p.93)。

これらの結果を見ても、思い描いていたことと現実の違いをもとにした理由が多いと考える。就く職業とその仕事内容、やってみたくらい仕事と就く職業等の整合性を検討したり、やってみたくらい仕事に関わる職業等を把握するようなキャリア選択肢の幅を広げたりする経験が、就職までの過程の中であまり行われていないことに起因するのではないかと考える。

また、キャリア教育における「基礎的・汎用的能力」は、「『4領域8能力』<sup>2)</sup>」においては焦点化されてこなかった『自己管理』の側面、例えば、忍耐力やストレスマネジメントなども重視するものである(文部科学省、p.15、2011a)とされている。「労働時間・休日・休暇」や「肉体的・精神的健康」に関しては、忍耐力はかえって働く者を苦しめる方向へ向かわせてしまうが、メンタル面の理由が離職理由の上位に挙がっている点から考えても、忍耐力やストレスマネジメントをする能力を身に付けることは、とても重要である。他の「基礎的・汎用的能力」が抜きこんでいたとしても、これらの能力がないと、発揮することができないのである。

諸富は、「“グランドスキル”こそ、仕事ができる人間になるうえで必要なもの」(諸富、p.92、2013)であると述べている。この「グランドスキル」について、諸富は、「『仕事で想定外のことがあった時に、どう平常心を取り戻すか』『批判を受けた時に、どうやってできることをしていくか』といったスキル以前のスキル、スキルの基盤となっているスキル」(諸富、p.92、2013)と具体的な例を挙げている。子どもたちに「『いざというときにはなんとかできる』という自信の根源となる“グランドスキル”」(諸富、p.92、2013)を身に付けていくことが重要である。

また、諸富は、「ほどよい依存ができるようになるためには、ヘルプシーキング(援助希求・非援助志向性)を発揮して、つらい気持ちを相談する。ほどよく人に頼りながら生きていくことが必要」(諸富、p.110、2017)と述べているが、困った時に誰に頼ればよいか分かるということも「基礎的・汎用的能力」の土台にあたるかと考える。

筆者が、自身の小学校教員としてのキャリア形成の過程で、仕事に対するマイナスのモチベーションをプラスに変えたものは何であったか分析すると、「自分のミッションが明確になること」「目指している先輩教員の働く姿を目にすること」「同じ目標をもって切磋琢磨して

いる仲間(同志)の存在」「子どもの成長した姿」「職場以外での自主的研修の場で受ける刺激」等であった。

これらのことから、「基礎的・汎用的能力」の土台にある未来に向けて歩み出すためのスキルは、「折れない・しなやかな心」「自分を支えている存在に気付く力」「人と深いかかわり合いを生み出すことができる力」「必要な援助を求めることができる力」等ではないかと考える。

#### ④ キャリア教育で求められていることを見つめ直し、「基礎的・汎用的能力」の土台について考える

諸富は、「キャリア教育が子どもの心を追い詰める」と題して、キャリア教育にについて、「『どんな人生を送りたいのか』キャリア意識を抱かせ、自分のキャリアについて深い自覚をもたせるための教育」(諸富、p.30、2013)と述べ、文部科学省が子どもに身に付けることを目指す「生きる力」について、「『生きる力』といえば、耳触りのいい言葉のように聞こえますが、キャリア教育は、単に『生きる力』というよりも、『生き残る力』『サバイバルできる力』を身につけさせようとする教育です。また、そのような力を育てるものでなければ、役立ちません。」と言及している。(諸富、p.30、2013)

「生き残る力」「サバイバルできる力」をいうと、頑丈な太い柱のような心をもつイメージが湧いてくるが、諸富の言うそれらの力は、「へこたれない力：困難なことが起こっても、慌てずに行動し、回復する」(深谷、p.116、2015)という「レジエンス」と言われるしなやかな心の力と同様のことを指していると考えられる。

#### ⑤ 「学びに向かう力」をもとに、「基礎的・汎用的能力」の土台について考える

次期学習指導要領で育成を目指している資質・能力の三つの柱は、「『高等学校を卒業する段階で身に付けておくべき力は何か』という観点や、『義務教育を終える段階で身に付けておくべき力は何か』という観点を共有しながら、各学校段階の各教科等において、系統的に示されなければならないこと」(中央教育審議会、p.74、2016)とされている。その際に、義務教育前の幼児教育において育みたい資質・能力とその後の教育で育む資質・能力の関係についてとらえておかなければならない。

「国際的にも忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルやいわゆる非認知的能力を幼児期に身に付けることが、大人になってからの生活に大きな差を生じさせるという研究成果」(中央教育審議会、p.72、2016)が挙がっており、これらの力は、義務教育期間に身に付けるべき「基礎的・汎用的能力」の土台にあたる

ると考える。この社会的情動スキルや非認知的能力にあたる資質・能力は、次期学習指導要領で育みたい資質・能力の柱の一つ「学びに向かう力・人間性等」にあたる資質・能力ではないかと考える。

幼児教育で生まれる「学びに向かう力・人間性等」を義務教育期間にどのように育んでいくべきかを明らかにしていく必要がある。

## 2-2 作成した「グランドスキル獲得

### カリキュラム(案)」について

「基礎的・汎用的能力」の土台にあたる能力を育成するカリキュラムを、「グランドスキル獲得カリキュラム」と名付けた。義務教育期間の9年間のうち、第2学年、第4学年、第6学年、第8学年の偶数学年を、キャリア教育重点学年と考え、それらの4つの学年において、子どもたちが、揺らぎながらも、自信をもって前に歩み出していくために必要な思いや願い、資質・能力等をどのようにつなげていくのか、段階的に表現した。それだけでなく、それらのつながりをとらえやすくするために、「思いや願いを表出させる」「資質・能力を身に付ける」「資質・能力を蓄積させ、活用できるようにする」等の教師の手立て、子どもの姿や表現物例等が見える化されたカリキュラムになるように工夫した。

図1、図2、図3、図4と図5がそのカリキュラム案である。

## 3. 成果と今後の課題

諸富は、「人生とは、『答えなき問い』を引き受け、問い続けるプロセスそのものである」（奈須・諸富、p.11、2011）と述べているが、義務教育9年間の学びや育ちのプロセスが見える化されたカリキュラムを作成する必要があると考え「グランドスキル獲得カリキュラム(案)」を作成した。

目指す子どもの姿を共有するために、具体的な子どもの発言や表現物の例をカリキュラムの中に入れた。そのため、教職員間で目指す方向性は共有しやすいと考える。しかし、スペースの関係で、例を複数挙げるとことは難しいため、限定的な子ども像ではないかという指摘を受ける可能性もある。しかし、目指す子ども像を言葉で掲げるだけでなく、そこに導くための具体的な戦略の共有こそが、教師の授業を変え、学校にいる一人ひとりの子どもの学びと育ちをよりよい方向に導くことが可能になってくる。見える化には限りがあるとしても、このような型のカリキュラムが、授業を主体的・対話的で深い学びに導くための熟議をする上での手掛かりとなっていくことを期待したい。今後、作成するだけのカリキュラムから、授業デザインや教師の手立てレベルの共有を図

り、活用することができるカリキュラムを作成していく必要性を感じている。

また、保護者や地域社会と目指す子ども像を共有できる「社会に開かれた教育課程」にしていくためにも、具体的な手立てレベルまでも共有できている教職員集団となることを目指していることが伝わる、このようなカリキュラムの作成が求められるのではないかと考える。

## 註

- 1) 「ペアレントクラシー」とは、イギリスの教育社会学者のP.ブラウンが言う「家庭で培われる能力やパーソナリティをもった家庭に育った子どもが、学校や進路選択においてより有利になる状況」（稲垣、p.50、2017）のことである。
- 2) 「4領域8能力」とは、「『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』（2004）で広く知られるようになり、単に『4領域8能力』というように『例』を省略して呼びならわされるようになった」（文部科学省、p.13、2011a）、「キャリア発達にかかわる諸能力(例)」のことである。

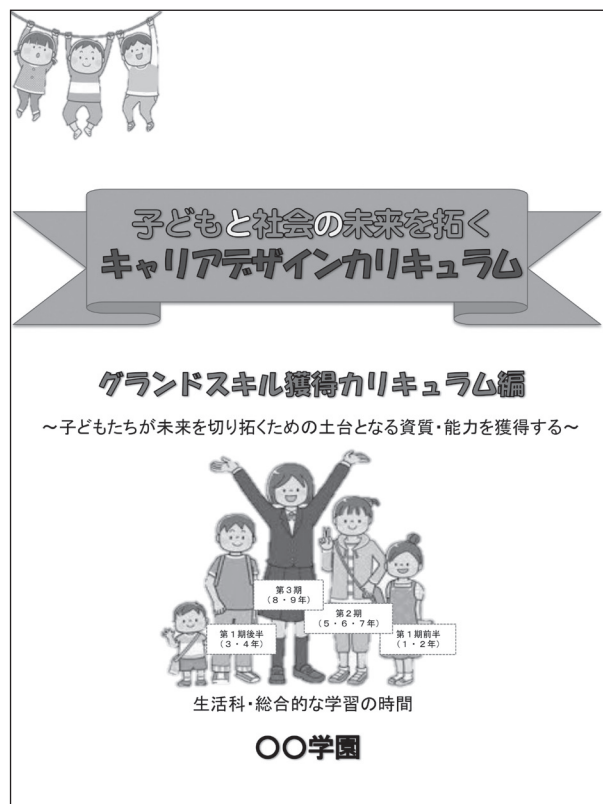


図1 カリキュラム案の表紙

第一期後半

第四学年

自分の過去・現在・未来を見つめる

名前にこめられた意味

大きくなって  
いやなことがあって  
かべに当たった時、  
.....

(名前:山口 よしき)の過去・現在・未来

過去



5才で虫が  
好きになる



現在  
10才

1/2  
成人式



好きだったもの・こと

好きだったことは、  
工作をすることです。  
よく空き箱やセロテープを使って  
工作をしていました。

私は、将来、  
患者さんにも  
お医者さんにも  
頼りにされる  
看護師に  
なりたいよ。



ぼくは、  
人を笑顔で  
いっぱいにする  
仕事がいいな。

こんな人になりたいな

しょう来、虫博士になって、  
まだだれも見つけていない虫  
(新種の虫)を見つけたり、  
だれもしていない実験を  
たくさんしたりしたいです。  
虫が活着ているのに動かなくなると、  
みんなが  
「死んだふりをした」と言うけど、  
本当に死んだふりをしているのか、  
調べてみたいです。

ぼく・わたしのめい

- ・虫のことをよく知っている
- ・絵をかくのが得意
- ・やさしい

もしも、困った時には?

お母さんやお父さん、  
そんけいしている先生に相談する。

よしきくんは  
好きなことを  
仕事にしたい  
のだね。



20才  
成人式

未来  
25才  
昆虫博士に  
なる

- ★名前に込められた  
思いや願いについて知る
- ★好きなもの・こと・  
時間等について自覚する

ぼくの好きな虫ランキング

- 1位: タイタン  
オオウスバカマキリ
- 2位: ○○
- 3位: ○○



今がんばっていること

虫をつかまえて、  
図かんなどで調べたり、  
本で虫の名前を  
漢字で調べたりするのを  
がんばっています。  
1番好きな虫の漢字は、  
「源五郎(ゲンゴロウ)」です。  
毎日、自主勉強で、  
昆虫についての説明文を  
書いています。



- ★自分の持ち味や役割、  
がんばっていること  
について自覚する
- ★支えられている  
存在を自覚する
- ★自分が頼れる人物に  
ついて自覚する

第一期前半

第二学年

好きなことやできるようになったことについて見つめる

すきすきカード

- ★没頭する
- ★試行錯誤する
- ★自分なりに工夫する
- ★繰り返ししかかわる
- ★親しむ
- ★愛着をもつ
- ★満足感を得る
- ★役割が増えた  
実感をもつ



図2 「グランドスキル獲得カリキュラム」の1ページ目(第1期)

(藤上、p.66、2015)の図8を参考にして作成

自分の成長を支えてきた存在や時間等について見つめる

名まえ (ひめ山 美衣)

- 読書をする時
- ねる時
- じゅう道の○○選手の試合を見ること
- いつも遊んだり相談にのってくれたりするおちゃんとおちゃん
- の言葉「△△△は△△のためにあるんだ」
- 元気をくれるたんじんの大山先生
- いつもおうえんしてくれている家族
- ベートーベンという言葉「努力した人が必ずむくわれるとはかぎらない。しかし、成功した人はみんな努力している」
- の言葉「△△△が必要なんだ」
- の言葉「△△△がいつか大きな財産になる」

★「1/2成人式」をきっかけにして、これまで・今・これからの自分について考えたよ

美衣さんは、たくさんの言葉に勇気もらっているのだね。だから、いつもあんなに何にでも一生懸命に取り組んでいるのだね。

ぼくは、昆虫が大好きだから昆虫博士になりたい。だけど、美衣さんは、大好きな柔道とは別に看護師になりたいという夢があるのだね。

私は、「周りの人に常に感謝して、気遣いのできる、やさしい思いやりのある大人になること」を目指しているよ。困った時には、「目標とする人」の話を聞きたいと思うよ。

★将来の夢の理由に着目する  
★自分を支えているものを自覚する  
★目標とする人、憧れの人、目標とする大人像をもつ

---

お世話になった人について見つめる

名まえ (ひめ山 みい)

- とうこうはんのまりんお姉ちゃん
- ほけんしつこの山口先生
- 学どうのよし田先生
- おばあちゃん
- たんじんのあらがき先生
- やさい名人田中のおじちゃん
- いつもおうだんほどりに立ってくれているみなさん

★好き！できる！がいっぱい学校って楽しいな

★たくさんの人にお世話になって大きくなったんだね。ありがとうございます。

★できること・好きなこと等が増えたことを自覚する  
★成長を見守ってくれている人々がいることを自覚する  
★感謝の思いをもつ

うまくできるようになったよ。

□くん うまくいかない時にやり方をおしえてくれてありがとう

やさいのピンチをすくってくださってありがとうございます。

お姉さん、お兄さん こんどはぼくが、1、2年生のおせわをするよ！

毎日、わたしたちのあんぜんをみまもってくださってありがとうございます

図3 「グランドスキルカリキュラム」の2ページ目(第1期)

(藤上, p.67, 2015)の図9を参考にして作成

第三期

第八学年

暫定的職業選択に向けて決め手に迫る



その職業を選んだ  
決め手は  
何だったのだろう？

その職業に  
目が向いたきっかけは  
何だったのだろう？

人間だからこそ  
できる仕事は？

好きなこと？  
それとも  
得意なこと？

その仕事には  
どんな能力が  
必要なのだろう

好きなことを  
仕事にしている？  
趣味にしている？



いつ  
決断した  
のかな？

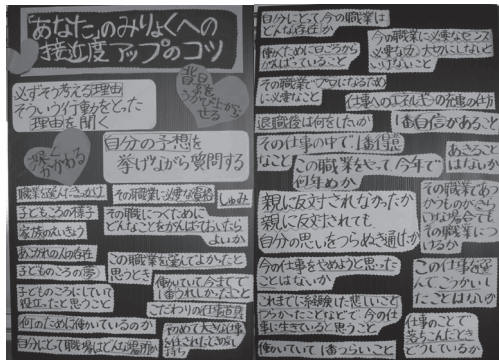
その職業に  
就く準備を  
いつからした  
のかな？

- ★きっかけ
  - ★決め手
  - ★決断の時期
  - ★必要な能力
  - ★人間だからこそ
  - ★自分だからこそ
- について  
分析する・見極める

第二期

第六学年

職業観への迫り方についてとらえる



整理する

自分が働く際に大切にしたいことは？

自分が、働く際に大切にしたいことを5つ挙げてみると？  
優先順位の高いものから書こう！

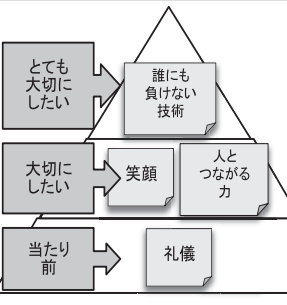
- 1
- 2
- 3
- 4
- 5



どうして、左の5つを選んだのか、  
どうしてその1つが最も大切なのか、  
解説してね。


★職業観に迫る視点を  
得る

○さん、△さん、□さんの  
共通の見方・考え方を探ると  
「〇〇〇」だった。



ぼくは、  
「誰にも負けない技術」を1位にした。  
その理由は、  
「誰にも負けない技術」があると、  
どの職業に就いても通用するし、  
人に必要とされるから。  
「笑顔」「人とつながる力」を  
2位にしたのは、…。



★共通点や相違点を見いだす

★優先順位を検討する  
★重要性を検討する

図4 「グランドスキルカリキュラム」の3ページ目(第2期と第3期)

(都留覚、藤上真弓、p.94、2012) から引用、(藤上、p.140、2014) の図3 を改変



**キャリア選択肢の幅を広げる**

自分が就きたい職業に関連マップ

★9年生になって進路を決定する際に生かしていこう！  
★どんな力を付けたらよいか考えてみよう

★関連付ける  
★キャリア選択肢の幅を広げる

文房具の開発  
保育士幼稚園教諭  
養護教諭  
栄養教諭  
教育関係の出版社  
小学校の先生  
教科書をつくる  
中学校の先生  
学童の先生  
教育学者  
スクールのカウンセラー  
高校の先生  
塾の先生

スポーツ実況  
レポーター  
フリー  
テレビ局  
キャスター  
局アナ  
ニュース  
キー局  
結婚式の司会  
イベントの司会  
ラジオ局  
地方局

私は、教育関係の仕事に就きたいから。

ぼくは、アナウンサーになりたいから。

---

**今後の自分を支える存在や職業に対する見方・考え方について整理する**

★自分の今後を支える存在、見方・考え方、技術等を自覚する

**今の自分を支えている存在は？**

今の自分を支えている存在について見つめよう  
<自分を支えている存在をイメージマップに表現しよう>

自分

1. ○○  
1番の相談相手になってくれるから。
2. 趣味(息抜き)  
趣味があると、それで息抜きができて、ストレス発散できるから。
3. お金  
働くとお金がもらえるから。お金がもらえると色々なことができるから。
4. 技術  
技術があると辛いときでも乗り切れるから。

★中学校生活や今後に生かしていける見方・考え方を得たよ！

**夢を叶えるための多様な道筋をとらえる**

未来への架け橋メモ ( )月( )日名前( )  
★将来の( )年後の一番がやいていると思う姿にたどり着くためには？

今の自分

( ) 芽生える自分

今の自分

未来への道ワークシート

★壁への構えができる  
★壁の乗り越え方を知る  
★多様な道のりをイメージする

自分が目指したい姿にたどり着くまでの過程にある壁や、その乗り越え方、多様な道のり等についてイメージできたよ。

**自分が働く際に支えられるであろう存在は？**

自分が、働く際に支えられるであろう存在を、5つ挙げてみるとする？

1	
2	
3	
4	
5	

**心に残った調査した人々の言葉！**

どうして、そのつどと来たのか、解説してね。

从

<この言葉を自分の言葉で説明するよ>

<これからの生活や自分の存在にどう生かしていきたい？>

図5 「グランドスキルカリキュラム」の4ページ目(第2期と第3期)

(都留覚、藤上真弓、p.94、2012)と(藤上、p.140、2014)の図5、  
(N・E・アムンドソン、G・R・ポーネル著、河崎智恵監訳、pp.61-62、2005)を改変

## 付記

本稿は、平成29年度科学研究費補助金（基盤研究（B））（研究代表者：吉川幸男 課題番号17H02703）による研究成果の一部である。

## 参考文献・引用文献

- 稲垣恭子（2017）「教育文化の社会学」、一般財団法人放送大学教育振興会、p.50、p.196、p.197、p.198、p.199
- N・E・アムンドソン、G・R・ポーネル著、河崎智恵監訳（2005）、ナカニシヤ出版、pp.61-62
- 川嶋太津夫（2011）「大学生のジェネリック・スキルを育成・評価するために」、『Guideline 11月号』、河合塾、p.54、p.56、  
[http://www.keinet.ne.jp/gl/11/11/report\\_1111.pdf](http://www.keinet.ne.jp/gl/11/11/report_1111.pdf)、2017.9.5アクセス
- 関西大学初等部（2015）「関大初等部式思考力育成法ガイドブック」、さくら社
- 経済産業省（2006）「社会人基礎力とは」、  
[http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku\\_image.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf)、2017.9.22アクセス
- 厚生労働省（2016）「新規学卒就職者の在職期間別離職状況」  
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyouanteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/0000177658.pdf>、2017.9.7アクセス
- 国立教育政策研究所（2016）「国研ライブラリー資質・能力[理論編]」、pp.41-42、p.46、p.47、東洋館出版社
- 田村学、黒上晴夫（2013）「考えるってこういうことか！『思考ツール』の授業」、小学館
- 中央教育審議会（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」、p.17、  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf)、2017.7.30アクセス
- 中央教育審議会答申（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」、p.19、p.20、pp.19-20、p.72、p.74  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)、2017.9.22アクセス
- 都留覚、藤上真弓（2012）「プロ教師に学ぶ 小学校 総合的な学習の時間の基礎技術Q & A」、東洋館出版社、p.94
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構（2017）「JILPT調査シリーズNo.164 若年者の離職状況と離職後のキャリア形成（若年者の能力開発と職場の定着に関する調査）」、p.91、p.92、p.93  
<http://www.jil.go.jp/institute/research/2017/documents/164.pdf>、2017.9.25アクセス

- 奈須正裕・諸富祥彦（2011）「答えなき時代を生き抜く子どもの育成」、図書文化、p.11
- 深谷昌志（2015）「『元気・しなやかな心』を育てるレジェンス教材集2 小学校高学年～中学校向き」、明治図書、p.116
- 藤上真弓（2014）「総合的な学習の時間におけるキャリア教育に必要な学びの研究～『生きる力』を身に付けていくための指導の工夫～」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第38号、p.140
- 藤上真弓（2015）「イベントだけで終わらせない『1/2成人式』の在り方について」、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第40号、p.66、p.67
- 藤上真弓（2017）「キャリアデザインカリキュラムの開発I～生活科・総合的な学習の時間・特別活動を中心として～」、山口大学教育学部研究論叢第67巻、pp.99-108
- 本田由紀（2005）「単元化する『能力』と日本社会～ハイパー・メリトクラシー化の中で～」、NTT出版、p.7、p.11、p.21、p.22、p.23、pp.22-23、pp.23-24
- 松下佳代（2014）「<新しい能力>の形成と課題」、『高校・大学から仕事へのトランジション』、ナカニシヤ出版
- 三村隆男（2004）「図解 はじめる小学校キャリア教育」、実業之日本社
- 諸富祥彦（2007）「『7つの力』を育てるキャリア教育」、図書文化
- 諸富祥彦（2013）「私たちは何のために働くのか」、日本能率協会マネジメントセンター、p.30、p.92
- 諸富祥彦（2017）「教師の自己成長と教育カウンセリング」、p.110、図書文化
- 文部科学省（2011a）「小学校キャリア教育の手引き<改訂版>」、教育出版、p.13、p.15
- 文部科学省（2011b）「中学校キャリア教育の手引き」、教育出版
- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説生活編」、p.1
- 山口県教育委員会（2017）「キャリア・ガイドブック夢サポート平成29年度版」、  
<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/2/0/0/2002ae5486e1fedde7b963bf30cacf7b.pdf>、2017.9.9アクセス